

聖書研究ガイド 2010年3期 『『ローマの信徒への手紙』における贖い』 啓示された光…信仰による義  
第11課 「恵みによる選び」

\* 神は全ての人類を愛しておられる。そして全ての人を救いたいと熱心に求めておられる。その思いに私たちはどう応えてゆけば良いのだろうか？先入観や偏見によって私たちは人を分け隔てしてしまう。聖書を読み、イエスに学んでいるのだが、頭ではわかっている事を生活の中で、その行いの中で現してゆけない弱さを持っている。神の真意を知り、イエスの模範に従ってゆく事で、どれだけの気づきを与えられるだろうか。どれだけ積み重ねてゆけるだろうか。神は全てを恵みによって与えて下さっている。神様の助けと導きを得たい。

## 1. 恵みを与えられた者たちの責任と役目

- **律法の目標であるイエス**：イエス・キリストの言葉、生き方は、いかに律法を扱い理解すれば良いかの模範である。律法主義はさまざまなかたちで私たちの心を巧妙に支配し（厳格さや善意の業績も、自分に向けてしまうなら誘惑となる）私たちは律法主義（自分の義）に陥ってしまう（ローマ 10: 3）。それは義の本質に気づかない事による（神の義を知らず）。聖書の道德律は私たちの罪を示し、救い主の必要、赦しの必要、義の必要を気づかせ、私たちをイエスに導く役目をする。律法を全うされたのはイエスのみであり、イエスを模範とし、その生き方と恵みを受け継ぐ事は、律法を守るという事になる（守れる）。
- **恵みにより選ばれたものが残る**：ユダヤ人たちのパウロに対する憎しみの理由の一つとして（そこには大きな誤解があるのだが）、選民意識の強いユダヤ人たちにとって、自分たちが異邦人と同等に扱われる事が屈辱的だった事が上げられる。しかし、パウロはあえて神の前では皆同じ救いの恵みを与えられた者であると説く。決してユダヤ人であるから救われるのではない（ローマ 11: 1~7）。本来、ユダヤ人に豊かな才能が恵みとして与えられているのは、人々を神に導くためであった。それが、全く別の目的で用いられてしまい、罪の誘惑となってしまった（選民意識、高慢、差別、自己中心など）。神の目から見ると、全ての人類は救われなければならない罪人なのである（ローマ 11: 7~10）。
- **同じ罪人である自覚**：異邦人を蔑視しているユダヤ人たちが自身も、自らの罪に気づき、同じ罪人である事を認め、共にイエス・キリストによる恵みにあずかる必要があることを自覚する事が必要だった。神は人の罪を赦したいと願っている。悔い改めの必要を認め、神に従う事を常に促されている（ローマ 11: 11~15）。
- **台木と穂木**：ユダヤ人と異邦人は、台木と穂木の関係（接ぎ木される木と枝）である。ユダヤ人によって異邦人たちに神の恵みがもたらされ、彼らを受け入れて養われてゆく事が、神の本来の目的であった。パウロはこの事を強調しながら相互の関係の深さを説いた（ローマ 11: 16~24）。しかしながら、台木と穂木は常に不安定な状態である事も忘れてはいけない。「いちど救われたら、つねに救われている」のではない。互いにイエスの十字架を見上げつつ歩んでゆく必要がある。力、知恵、信仰、愛、全て良きものは神から与えられるからである。接ぎ木された台木と穂木は神がイエス・キリストを通して養われる。

## 2. 拒む者をも愛しつけられる神

- **異邦人全体の救い**：異邦人とはユダヤ人以外の人類を示す言葉だが、「異邦人全体が救いに達する」（ローマ 11: 25）とは、福音が全世界に伝えられるという事を意味する。これは、世の終わりのしるしの一つでもある（マタイ 24: 14）。使徒パウロによって始められた異邦人伝道は、福音を全世界、全ての人々に送り届ける働きで、私たちもその恩恵にあずかっている。
- **全イスラエルの救い（秘められた計画）**：神はイエスを拒み続けるユダヤ人たちを導かれ続けておられる。決して彼らは神に見捨てられた訳ではない。神は全ての人類を愛し、救いの対象とされている。終わりの時代には、最もかたくなであろう彼らがイエスを救い主（キリスト）であることを認め、信じ、その福音を伝える者となる。そうなれば、福音宣教の働きは驚くばかり急速に進展してゆくだろう（「神の賜物と招きとは取り消されないもの」ローマ 11: 29）。セブンスデー・アドベンチストは全世界 209 の国々で活動し、なおも福音宣教の働きを進められている。そこにユダヤ人の改宗者が加えられたとする。どれだけの大きな、そして速やかな働きが、再臨に向かって備えられてゆくだろうか。

- 不従順な者に対する神の憐れみ：神に対する不従順に対して、神は全てを万事益とされ、「災い転じて福となす」。人の罪深さをも逆手にとってダイナミックに扱われる（ローマ 11：28~36）。災いや悪は罪の結果であり、そこから来る苦しみや、痛み、悲しみは、その報いであるにもかかわらず、神はそれをあたかも御自身の責任であるかの様に受け止めて下さっている（私に代わって神が罪の罰を負って下さった=キリストの十字架）。罪に気づき、悔い改めを求め、導きに委ねる私たちは、神の恵みにより災いを教訓とし、肥やしとし、成長できる様にと神が整えて下さっている。そんな神の思いを私たちは裏切ってはいけない。何をもって裏切るのか？それは、自らが「つまずきの石」となる事である。仕返しをする事は神の御旨ではない。赦しあう事が御旨である。かつて初期の時代のキリスト教会がユダヤ人たちを排斥したり、彼らの心を傷つけたり（律法の軽視、安息日変更などの極端な異教化）したように、今後あらゆる事でユダヤ人たちに対してもつまずきとなってはならない。互いにみ言葉によって養われ、悔い改め、イエスに目を注ぎ、救われる者としてイエスの模範に従い、イエスと共に生きる事である（ローマ 11：31）。